

第六回和辻哲郎文化賞 一般部門 受賞作

土居 良三 著『咸臨丸海を渡る―曾祖父・長尾幸作の日記より』

(1992年11月15日 未末社 刊)

土居 良三 どい りょうぞう 大正10年(1921)生まれ。平成17年(2005)没。東京都出身。

東京大学法学部政治学科卒業。在学中応召、海軍経理学校卒業。復員後、片倉工業株式会社勤務、株式会社テキスタイル・コンサルティング代表取締役として、70歳まで繊維素材・商品の開発に従事。著作は、『軍艦奉行木村撰津守』、『幕臣勝麟太郎』、『開国への布石 評伝阿部正弘』、『評伝堀田正睦』、『学徒特攻 その生と死』がある。

受賞のことは

今回思いもかけない賞を戴き、二重の言い尽くせない喜びを感じています。一つは『風土』が私の永年の愛読書であること、二つは、戦争末期一年余りを過ごした姫路市からのものであるからです。

今後も幕末当時の優れた人々について書き、受賞に報いたいと願っています。

《選考委員評》

かがやかしい作品

司馬 遼太郎

三十年ほど前、大阪のしにせの古書籍商の番頭さんが、新本屋さんになるといって、あいさつに見えた。

このひとが、“ついでに、といっちは何ですが”といっちは、『幕末軍艦咸臨丸』をみせてほしいという。なが年、古本屋につとめていながら、幻の名著といわれてるその本を見たことがなく、辞めるにあたってそれを見たい、といった言葉が、私には忘れがたい。

咸臨丸とは、いうまでもなく、幕府海軍が所有した小さな軍艦のことである。一八六〇年、日本の艦船としてははじめて太平洋を横断した。艦長(勝海舟)以下、塩飽諸島の水夫にいたるまで、大航海に経験がなかった。

乗員のなかには、福沢諭吉もいた。乗員はいずれも歴史における個々の運命の浮沈はべつとして、文明という名におけるピルグリム・ファーザーズというべきひとびとだった。

前掲の本は、文倉平次郎という、無名のひとによって書かれた。艦の沿革だけでなく、渡米のときの乗員の履歴についても資料と足でもって精査されており、さらには他の幕府軍艦についてもふれられていて、幕末軍艦についての原典というべき本である。

が、このたび、その原典を越えるような本が出た。乗員のひとりの曾孫である土居良三氏が、文倉本に価値を置きつつ、同書の誤りをただし、多くの不足を補い、さらに創見を加え、新たな船が進水したような著作をされた。

咸臨丸は、滅後、二度浮かんだことになる。

さらには、この一冊のおかげで、「和辻哲郎文化賞」もまた光りを増したといえそうである。

ありがたい作品

陳 舜臣

なにかの役割をはたして、歴史にその名をのこした人物の伝記のたぐいを、その関係者が書くとなれば、たいていどこかに身最良な見方が、顔をのぞかせるものである。土居良三氏の『咸臨丸海を渡る』は、そのような傾向がまったくない。全巻を通じて、みごとなほどフェアな姿勢が崩れていない。著者の曾祖父にあたる長尾幸作ののこした『亜行日記鴻目魁耳』と題する記録がもとになっているが、これまでに公表されている諸文献もていねいに吟味され、咀嚼されている。おそらく咸臨丸関係文献では、本書が決定版ということになるだろう。

けれども、本書の価値は、たんなる「文献」ととどまらない。和辻哲郎文化賞に価するの

は、文献や記録をこえた、芳醇な文化の香りがある。その香りは、修辭の技巧を超えた、きわめて率直な文章の流れが、最後まで保たれているところから漂ってくるようだ。

咸臨丸を舞台に演じられた人間のドラマが、じつにいきいきとえがかれている。おそらく著者は、そのようなドラマチックな効果などは、念頭になかったにちがいない。それにもかかわらず、登場してくる人物が、それぞれ奥行を与えられ、読者に百数十年前の呼吸を伝えてくる。資質というほかないが、「文は人なり」ということであろう。

登場人物のなかには、勝海舟、福沢論吉、あるいは中浜万次郎といった、日本史のビッグネームがあり、誰もがその名を知っている。彼らが歴史に光りを放っているのは、概説書によって私たちは知っているが、本書はその光源がどこにあり、だからどのようにきらめいたか、事を分けて教えてくれる。これまた著者は意図しなかったであろうが、読者は本書が与えてくれるカタルシスを堪能することになる。読書のよろこびとは、このような作品に接することであると、読み終えたあとお礼を述べたくなった。

遺賢が野にある

梅原 猛

今回の候補作はそれぞれ個性的な作品が多く、落とすには惜しかったが、私は、受賞作には土居良三氏の『咸臨丸海を渡る』を推したいと思って選考委員会に臨んだ。思いがけなく司馬氏も陳氏も同じ意見であり、委員会は短時間で終わった。選考委員会がこんなに早く終わったのは例がない。

『咸臨丸海を渡る』は意外な力作である。意外というのは、著者は文筆業を専門とする人ではなく、長い間、大会社の社長などを務めた実業の人であるからである。『咸臨丸海を渡る』は氏の処女作であり、定年になって実業の世界から身を引いたときの作品であるが、それが実に立派なできである。

氏の咸臨丸に対する関心は、その乗組員であった曾祖父に対する関心からである。いわばこれは一種のルーツのものであるが、このルーツを明らかにしようとする著者の関心は並々のものではない。この咸臨丸についての日本語の資料及び英語の資料をほぼ全部詳しく読み、それによって事件の真相に新しい光をあてる。その点、実に客観的であるが、しかし著者の目は、咸臨丸に乗り組んだ一人一人の人間の心の奥に届き、その一人一人の人間の心の陰影をうまく描いている。この旅行のリーダーの木村摂津守と船長にあたる勝海舟との心の深い対立、それに勝に反発して木村に同情する福沢論吉など、個々の人間がよくとらえられている。

野に遺賢なしとはよく言われる言葉であるが、このような遺賢が野にあるのである。このような遺賢を発見したことは大変嬉しい。今後の著者の活躍を望みたい。